

ふたたび鉄炮伝来論

村井章介氏の批判に応える

宇田川武久

Another Study of the Introduction of Guns to Japan : As a Counter-argument to the Criticism of Dr. Shosuke Murai
UDAGAWA Takahisa

はじめに

- ① 朝鮮王朝と明国史料の火炮の解釈
- ② 日本に伝来した鉄炮の源流
- ③ 多様な鉄炮の存在は分散波状的伝来を意味するか
むすび

【論文要旨】

すでに天文十二年（一五四三）八月の種子島の鉄炮伝来は歴史の常識になっている。しかし、この根拠は伝来から半世紀以上もたった慶長十一年（一六〇三）に南浦文之の書いた『鉄炮記』にある。こんにちの鉄炮の隆盛は、ひとえに時堯が鉄炮を入手した功績によるものと顕彰し、とても天文十二年ごろのできごととは思えない、津田監物や根来寺の杉坊、堺の商人橋屋又三郎、松下五郎三郎なる人物を登場させて、鉄炮が種子島から和泉の堺、紀州の根来、畿内近邦から関東まで広まったと書いている。それなのにいまも『鉄炮記』の語る種子島の鉄炮伝来と伝播を唯一とする見方は少なくない。そもそも種子島の鉄炮伝来は漂着という偶発的出来事であり、一大船は倭寇の巨魁王直の唐船であり、かれらは明の海禁政策に違反して東アジアの海を舞台に密貿易に奔走し、九州や西国の大名や商人と深く結びついた存在であった。私はこの事実に着目して倭寇が東南アジアの鉄炮を種子島と九州および西国地方に分散波状的に伝えた

と主張してきた。

鉄炮伝来の研究は明治以来、こんにちまで百年以上の蓄積があるものの、最近、中世対外関係史の分野において議論が再燃し、なかでも村井章介氏の発言がきわだっている。同氏は私の倭寇鉄炮伝来説には、①「朝鮮・明史料の火炮の解釈」、②「日本に伝来した鉄炮の源流」、③「様々な鉄炮の仕様が分散波状的伝来を意味するのか」の三点の疑問があるにもかかわらず、宇田川は十分な反論もおこなわないまま、倭寇鉄炮伝来説を独走するとつよく批判した。そして村井氏は鉄炮の伝来はあくまでヨーロッパ世界との直接の出会いとして理解すべきと力説する。まさにこれは見解の相違であるが、本稿の目的は銃砲史・砲術史の視点から村井氏の三点の批判に応えることにある。

【キーワード】 鉄炮記、鉄炮伝来、倭寇、南蛮鉄炮、砲術